

# 豪運な拳闘士のNewWorldOnline

龍蟹迅

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

VRMMOゲーム『NewWorldOnline』の発売日に参戦した少女

彼女の名は『雪風緋彩』

彼女のとんでもない豪運がありえない出来事を引き起こす

目次

拳闘士のプロローグ	1
拳闘士と防御特化	19

## 拳闘士のプロローグ

「待ってましたー！！」

部屋の中で一人の少女「雪風緋彩」は一つのパッケージを持って元気に叫ぶ。

それは緋彩は欲しがっていたVRMMOゲーム『New World Online』である。

発売前からその存在を知っていた緋彩はまだかまだかとハードを買って待っていた。

緋彩は今までゲームなどをやった事はあったがイマイチという結果に終わっている。

と言うのも緋彩は格闘技などをしており、その時の高揚感が感じられないと言う理由で楽しめていなかった。

その時に『New World Online』の告知を見て、これならばと思い『New World Online』が発売されるのを待っていた。

そして遂にこの日、『New World Online』が発売され颯爽と向かい『New World Online』を買ってこれまた颯爽と家へと帰宅した。

帰宅したと同時に直ぐにゲームをやりたいという衝動を抑えながら今日やるべき宿題を終わらせ、今に至る。

緋彩は早速『New World Online』のソフトをパッケージから取り出し、ハードにセットする。

初期設定を手早く終わらせ、緋彩はそのままハードをつけて横になる。

「GAME START!」

緋彩は元気良く言いながら『New World Online』を始めを始めた。

---

電腦世界へとダイブした緋彩は自身の設定を始める。

「プレイヤー名は『イエーガー』！ふふん、もう決めてるもんね！」

既に決めていたプレイヤー名をパネルに入力し決定すると別の内容に変わる。

片手剣、大剣、メイス、斧、弓、杖、大盾等々と様々な装備が並んでおり緋彩はどれにするかと悩んでいた。

「うーん、色々あるなあ……。出来れば少し力が強くて速いやつがいから刀あたりかなあ……。……。……。……。ん？」

緋彩は刀にしようかと思っているのとあるものが目に入った。

それは拳と靴のマークが描かれているアイコンだった。それはつまり……。。

「うそ!!素手での攻撃もあるの!?!これ!!これにする!!」

緋彩はすぐ様それを選び、次の項目へと移る。

「ステータスポイントかあ。それじゃあつと。」

緋彩は考えながらステータスにポイントを振っていく。

全ての設定を終えた緋彩は光に包まれる。

目を開けると活気あふれる城下町の目に映った。

周りには緋彩もとい、イエーガーと同じようにログインしてきたプレイヤーが大勢いた。

イエーガーは目をキラキラとさせながらもステータスのパネルを出した。

HP 35 / 35  
MP 20 / 20  
VIT 10  
STR 35 (+20)  
AGI 35  
DEX 20  
INT 0

STR 35 (+20)  
VIT 10  
AGI 35  
DEX 20  
INT 0

装備

頭【空欄】

体【空欄】

右手【バトルグローブ】

左手【バトルグローブ】

足【空欄】

靴【バトルシューズ】

装飾品【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

なし

「よしっ！」

イエーガーは確認し終わると早速町の外へと向かい戦闘に出た。

??????

町の外に出るとチラホラとプレイヤーを見かける。

まだそんなに多くないがイエーガーはなるべく人がいない方へと走っていく。

「ここならいいかな？」

人がいない所にたどり着くとイエーガーは足を止め、戦闘態勢をとった。

「さあ！どこからでも来い！」

イエーガーがそう叫ぶと茂みからモンスターが飛び出してきた。

イエーガーはそれに反応し回避する。

飛び出してきたモンスターはリングをうさぎの形にしたモンスターだった。

それを見てイエーガーは（可愛い！）と思うも相手はモンスター、倒さなくてはいけない。

イエーガーは再び構えて戦闘態勢に入る。

ウサギのモンスターは走り出し、イエーガーに向かって体当たりしてきた。

「はあっ！」

「キュッ！」

そこを狙ってイエーガーはウサギのモンスターに蹴りを入れる。

蹴られたウサギのモンスターはそのまま吹き飛び、気に激突した。

それでもウサギのモンスターは負けるものかとも言うかのように起き上がり、再びイエーガーに体当たりしてきた。

イエーガーも負けじとウサギのモンスターに立ち向かう。

しばらくしてイエーガーはウサギのモンスターを倒した。

『レベルが2に上がりました。』

「おっ！レベルアップ！」

イエーガーはレベルアップした事に喜びレベルアップの確認をする。

ステータスポイントの所を見ると割り振るポイントが0から5に増えていた。

イエーガーは早速そのポイントをSTRに全て振った。

ステータスポイントを振り終わったイエーガーは次の敵を探しているとふと、視界の端に輝く何かがあった。

よく目を凝らしてみるとそれは金色に輝くカブト虫だった。

更によく見てみるとHPバーがあるので恐らくは敵なのだろうと思ひ、イエーガーは金色のカブト虫に近づく。

途端、金色のカブト虫はイエーガーがいる方向とは真逆の方向へと飛んで行った。要は逃げたのである。

「あっ！逃げた!?待てえ!!」

イエーガーは全力疾走で金色のカブト虫を追いかける。

しかし、金色のカブト虫の方がAGIが高いのかドンドンと距離が遠くなってしまう。

「もお……………止まって……!!」

イエーガーは近くに落ちてた石を拾うと金色のカブト虫に向かって全力で投げた。

石はそのまま金色のカブト虫へと向かっていき……………見事に命中して金色のカブト虫を倒した。

「……………え？」

あまりの呆気なさにイエーガーは立ち止まりキョトンとなった。

まさかのHPの少なさとVITの低さにイエーガーは驚愕するか無かった。

そのまま金色のカブト虫が倒れた場所まで近づくと足元にメダルのような物が落ちていたのに気づいた。

「なんだろう？これ？」

イエーガーはそれを拾うとそのアイテムの説明を見た。

祭壇への鍵【レア】

『太陽の祭壇』に行く為に必要なメダル。

『太陽の祭壇』？何処にあるんだろう？」

そう言っ立ち上がり『太陽の祭壇』を探し始める。

モンスターを倒しながらも探すが中々見つからず今日の所は切り上げる事にした。

先程の金色のカブト虫と祭壇への鍵がどれ程の確率かも知らずに。

「はあ!?嘘だろお!」

運営ルームにて1人のスタッフが驚愕の声を上げた。

その声に反応して、他のスタッフも何事かと寄ってきた。

「なんだなんだ?どうした?」

「誰かが祭壇への鍵を手に入れたぞ！」

「「はあっ!」「」」

驚愕の声を上げたスタッフの発言に他のスタッフも驚愕の声を上げた。

「いやいやいやいやいや!!ありえないだろ!?!まずそれをドロップする金色のカブト虫の出現率と遭遇率をかなり超低確率に

したし祭壇への鍵のドロップ率もかなり超低確率にした筈だろ!? しかもまだ一日目だぞ!」

「お、おい!!誰が手に入れた!」

「ちよ、ちよつと待つてろ……………」

他のスタッフに言われ、大慌てで調べる。

そして、その結果が画面に映る。

「こいつだ!!イエーガーだ!!」

「嫌なんで女の子なのに男っぽいプレイヤー名なんだよ!」

「今そこじゃないだろ!」

「おい!!その時の映像を見せろ!!」

「了解!!」

スタッフは直ぐに祭壇への鍵を手に入れた時の映像を映し出した。その一部始終を見たスタッフ達はそれぞれありえないという顔を浮かべた。

「いや……投げた石が見事にクリーンヒットするって……どれだけ運が良いんだよ……………」

「……………これ、太陽の祭壇を見つけるのも時間の問題では?」

「いやいや。流星にそれはないだろ。」

「ですよ〜。」

スタッフ達は「ありえない。」だの「流星にない。」と言ってそれぞれの確認に戻る。

しかし、三日後。それは起こった。

三日後。

続けてログインしたイエーガーは装備やアイテムなどの準備を終え、再び太陽の祭壇の搜索へと向かった。もちろん、レベル上げをしながら。

そして、遂にその時が来た。

「?…なんだろう?」

イエーガーは森に妙に開けた場所へとやって来た。

イエーガーは不思議に思い、開けた場所を入念に調べた。すると、中央辺りに丸い窪みがあるのを見つけた。

丁度、祭壇への鍵と同じ大きさの窪みだ。

イエーガーは祭壇への鍵を取り出すとその窪みに祭壇への鍵をはめた。

その瞬間、そこを中心に光り輝く魔法陣が現れた。

「キヤツ!？」

突然の魔法陣の眩しさにイエーガーは目を塞いだ。

それと同時に、イエーガーは転移した。

運営ルームにて

「イエーガーが太陽の祭壇に行きやがった!!!」

「「まだ4日しかたってねえ!!!」」

スタッフ達の絶叫が鳴り響いた。

「ん……………あれ?」

イエーガーは目を開けると見た事ない居場所に立っていた。

地面は石畳になっていて、そこから道のように伸びている。

道の先には階段があり、その頂上の方に祭壇あるのが見えた。

イエーガーは登る前にステータスの確認をした。

イエーガー

HP 21

MP 35 / 35

MP 20 / 20

【STR 65 (+20)】

【VIT 20 (+31)】

【AGI 45】

【DEX 20】

【INT 10 (+15)】

装備

頭【星の髪飾り】

体【戦闘着】

右手【バトルグローブ】

左手【バトルグローブ】

足【戦闘着】

靴【バトルシューズ】

装飾品【フォレストクインビーの指輪】

【空欄】

【空欄】

スキル

【体術Ⅱ】【光魔法Ⅱ】

【MP回復速度強化小】

【毒耐性小】

【毒耐性小】

「コレで……大丈夫だよね?……うん!!大丈夫!!」

瞬不安になるも頭を振り頬を両手で叩き気合いを入れる。

意気揚々と階段を登って行く。

段々と頂上へと近づいていき、ようやく頂上へと着いた。

広い祭壇をキョロキョロと見回しながら中央に向かって行く。

中心に差し掛かったと同時に祭壇の周囲に結界の壁が生成されて

いき、イエーガーを閉じ込めた。

突然の事にイエーガーは驚きながらも直ぐに戦闘態勢を取って周

囲を警戒した。

「オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ!!」

「え!?上え!?ひゃああ!!」

突如上空から咆哮が聞こえ、イエーガーは空を見上げる。

そこにはライオンの獣人がイエーガーに向かって攻撃を仕掛けて

いた。

イエーガーはすぐ様飛び退き地面を転げ回った。

「オオオオオオオオオオオオ!!」

「うあつぶないいい!!?」

ライオンの獣人『百獣王』はその隙を逃さず続けざまに攻撃する。

イエーガーは転げ回りながら起き上がり、百獣王から距離をとる。

「オオオオオ!!」

「ふっ!やあああ!!」ドゴオ!!

「グウウ!」

繰り出してきた百獣王の攻撃をイエーガーは躲し、百獣王に一撃を与えた。しかし、HPは少ししか減ってなく一割にも満たしていない。

「っ、強い!!」

「フンツ!!」

「うわつと!!」

百獣王はイエーガーに蹴りを入れるがそこは跳躍し回避する。

イエーガーは負けじと百獣王に少しずつダメージを与えていき、百獣王も負けじと攻撃を繰り出していく。

途中何度か無くなりかけたが、そこは百獣王から距離をとりHPポーションで回復する。

そんなルーティーンを何度か繰り返していき、ようやく五割をきった。そのときだった。

百獣王はイエーガーから距離をとり深く溜める。

「な、何?」

イエーガーは何か来ると思い身構える。

そして、百獣王は動き出す。

それはもう目にも留まらぬ速さでイエーガーの周りを動き回る。

「は、速い!?!ってきやあ!?!」

あまりの速さにイエーガーは戸惑っている。と後ろから百獣王が攻撃を仕掛ける。

イエーガーはそれを察知したのか頭を下げる。

それでも未だに勢いは止まらず、イエーガーの周りを動き回る。

「あああ!!もう!!」

イエーガーはその場で一度地団駄を踏み構える。

そして……………。

「速いってばああああああああ!!」

ドゴオオオオン!!

「ガアアアアアアアアア!!??」

「あつ、当たった。」

イエーガーはその場から回し蹴りをして百獣王の腹部に思い切り攻撃をする。

百獣王は突然の攻撃に対処できなかったのか遠くへと吹き飛んで行った。

イエーガーも当たるとは思わなかったのかキョトンとした。

イエーガーは気づいていないかもしれないが、これがイエーガーの最大の長所。それは“運”である。

金色のカブト虫に会ったのも、祭壇への鍵を手に入れたのも、祭壇の入口を見つけたのも彼女の運が原因である。

それは最早、幸運と言うよりも豪運である。

しかし、イエーガーはその事に全く気付いておらず、なんも不思議に思っていない。

だからこそ、ある意味タチが悪い。

百獣王が怯んでるうちにイエーガーはHPを回復しておく。

するとイエーガーはある事に気付いた。

百獣王が先程よりも多くダメージを受けていた。

(もしかして……………)

イエーガーはとある可能性に導き出す。

立ち上がった百獣王は再び高速で動き出す。

イエーガーは精神を研ぎ澄まし、集中する。

百獣王が動き回る音を聞き、百獣王の気配感じて、どこから来るのか予想する。

「!そこだアア!!」





『百獸王』を素手で単独勝利。

【大物喰らい】

ジャイアントキリング

HP、MP以外のステータスのうち四つ以上が戦闘相手よりも低い値の時にHP、MP以外のステータスが二倍になる。

取得条件

HP、MP以外のステータスのうち、四つ以上が戦闘相手であるモンスターの半分以下のプレイヤーが、単独で対象のモンスターを討伐すること。

「おお!! 凄い!!.....」

ジャイアントキリング 【大物喰らい】は要らないかな。」

イエーガーは【太陽神】と【成長強化】のスキルに目を輝かせたが

ジャイアントキリング

【大物喰らい】はイマイチだったのか直ぐに【廃棄】した。

ステータスポイントを見れば15もあつた。

【成長強化】の影響で二倍になるのでステータスポイントは30になるということだ。

イエーガーは早速割り振って転移の魔法陣に向かおうとする。

「あれ? 宝箱だ。」

イエーガーは百獸王が倒れた場所に宝箱があることに気づく。

宝箱に近づき、イエーガーは宝箱を開けた。

「ふあああ.....何コレ!!」

イエーガーは宝箱の中身を見て目を輝かせた。

宝箱の中身は炎の様な勇ましい赤を基調としていて端は炎の様にユラユラと思わせるかのような橙色があしらわれたマフラー。

白を基調としつつも薄く橙色をあしらった外套。

百獸王も身に着けていたベルト付きの黒のレギンス。

赤い宝玉が取り付けられた銀色の籠手がそれぞれ二つ。

黒を基調とし赤いラインの入ったブーツ。

イエーガーはそれを見て急いで装備を確認した。

【ユニークシリーズ】

単独でかつボスを初回戦闘で撃破しダンジョンを攻略した者に贈られる攻略者だけの為の唯一無二の装備。

一ダンジョンにつきり。

取得した者はこの装備を譲渡出来ない。

『信念のマフラー』

【INT+10】【MP+10】

スキル【フレイミングフォース】

【破壊不可】

『拾玖纏鎧』

【STR+30】【VIT+15】

スキル【光合成】

【破壊不可】

『百獣王のレギンス』

【STR+35】【VIT+10】

【破壊不可】

『ソルブレイズ』

【STR+20】【DEX+10】

【破壊不可】

『ソルブラスト』

【STR+20】【AGI+10】

スキル【光速化】

【破壊不可】

【フレイミングフォース】

1分間それぞれの攻撃に炎属性が付与される。

受けた相手はしばらくの間「火傷」状態になる。

30分後再使用可。

【光合成】

天候が晴れ、または快晴の時1、5秒間に1%回復する。

別の天候の場合、回復しない。

【光速化】

20秒間、AGIが4倍になる。

ただし、移動中に攻撃を受けるとダメージが3倍になる。

一時間半後、再使用可。

「わあ!!すごいーあつ。さっきのライオンさんがやったのこれか!!……すごいリスキーだね。」

「エーガーは確認が終わると装備欄を弄って装備する。」

エーガー

v 26

HP 35 / 35

MP 20 / 20 ( +10 )

【STR 75 ( +105 )

【VIT 30 ( +31 )

【AGI 55 ( +10 )

【DEX 20 ( +10 )

【INT 10 ( +10 )

装備

頭 【信念のマフラー：フレイミングフォース】

体 【拾玖纏鎧：光合成】

右手 【ソルブレイズ】

左手 【ソルブレイズ】

足 【百獣王のレギンス】

靴 【ソルブラスト：光速化】

装飾品 【フォレストクインビーの指輪】

【空欄】

【空欄】

スキル

【体術Ⅱ】 【光魔法Ⅱ】 【太陽神】

【リフレッシュ】 【ヒール】

【MP回復速度強化小】 【成長強化】

【毒耐性小】

「うん!!とつてもいい!!この【光速化】、帰り際に使ってみよう!!」

そう言つてイエーガーは魔法陣に乗つてその場から去つた。

向へと戻つた後は、明日の事もあるのでそのままログアウトする事にした。

【NWO】 ヤバい奴が横切つた

1名前：名無しの大盾使い

ヤバい、めっちゃヤバヤした

2名前：名無しの魔法使い

ヒヤヒヤした？

3名前：名無しの槍使い

まて、何があつた

4名前：名無しの大剣使い

k w s k

5名前：名無しの大盾使い

俺の目の前を高速で動く何かがいっきりに横切つてマジでビビつた

6名前：名無しの槍使い

は？まだ4日しか経つてないぞ

それホントにプレイヤーか？

7名前：名無しの魔法使い

∨ 6

それな

8名前：名無しの大盾使い

けど実際に俺の目の前を横切ったんだよなあ  
赤色しか見えなかったけど

9名前：名無しの弓使い

待て、今それに該当しそうな子見つけたかも

10名前：名無しの大剣使い

マジでか!?

11名前：名無しの弓使い

ああ

赤いマフラーを着けたボーイッシュな感じの娘がたった今ログア  
ウトした

12名前：名無しの魔法使い

他はどんな特徴だった

13名前：名無しの弓使い

あんま見れなかったけど

白いコート(?)を着ていたのはわかった

14名前：名無しの大盾使い

言われて見りゃ白い色も見えたかもしれん

15名前：名無しの槍使い

ウソオ!?

いやいや!まだ発売してから4日しか経ってないぞ!

それなのにレベルが高そうな装備を手に入れたのか!?

16名前：名無しの大盾

取り敢えず、情報が足りん

またその子を見かけたら情報をくれ

17名前：名無しの魔法使い

ラジャ!

18名前：名無しの槍使い

ラジャ!

19名前：名無しの大剣使い

ラジャ!

20名前：名無しの弓使い

ラジャ!

自分の事が話題になっているとは知らずに。

## 拳闘士と防御特化

百獣王を倒してからほぼ1ヶ月。

イエーガーは『New World Online』で充実したプレイをしていた。

百獣王を倒してからもレベル上げをしていきつつ、最近知り合った生産職のフレンドの依頼で採掘したりアイテム探しなどをしていた。そして、現在のイエーガーのステータスはというと。

イエーガー  
Lv 34  
HP 35 / 35 (+30)  
MP 20 / 20 (+20)

STR 85 (+105)  
VIT 40 (+31)  
AGI 65 (+10)  
DEX 30 (+10)  
INT 20 (+10)

### 装備

頭【信念のマフラー：フレイミングフォース】

体【拾玖纏鎧：光合成】

右手【ソルブレイズ】

左手【ソルブレイズ】

足【百獣王のレギンス】

靴【ソルブラスト：光速化】

装飾品【フォレストクインビーの指輪】

【空欄】

【空欄】



くる事などが多い。

そして、その素材の中にレアな素材などが混ざっている事がよくある為なのが最もな理由なのだが。

「(またレアな素材が混ざってる。) 凄いわねイエーガーちゃんは。」

「えへへっ♪」

イズに撫でられてるイエーガーは嬉しそうに照れていた。

それを見たイズは少し悪戯っ子のような笑みを浮かべ、脇腹をくすぐり始めた。

「ひゃあ!?ちよつ、イズさん!やめて!あははははっ!くすぐりたい  
てばあ!」

「イエーガーちゃんが可愛いのが行けないのよ?ほれほれ♪」

「きゃー♪」

そうやって二人が戯れていると扉の開く音が聞こえる。

扉の方に視線を向けると大盾を背負った男性とその後ろから初期装備の大盾を持った女の子がやって来た。

「……………楽しそうだな。」

「あら、クロム。」

「クロム?それって確かバリツバリのトッププレイヤーの。」

「そのとおりよ。」(貴女もその一人だけど。)

そうやってイズはイエーガーと戯れるのをやめてカウンターへとつく。

「それでどうしたの?まだ盾のメンテには早いはずだけど?」

「ああ、ちよつと大盾装備の新入りを見つけてな:衝動的に連れてきた。」

そう言ったクロムの後ろから、女の子が姿を見せる。

「あら、可愛い子ね……クロム、衝動的にこの子を連れて来たの?通報した方がいいかしら?」

そう言っつて、イズが青いパネルを空中に浮かべる。

「ち、ちよつと待てよ!それは、何ていうか言葉の綾だつて!」

「ふふつ:分かってるわよ。冗談冗談。」

「大盾のよしみで連れてきたのかな?」

「はー…心臓に悪いから止めてくれ」

クロムはそう言つてホッと息を吐く。

そんなクロムを他所に、イエーガーは女の子に近づいてきた。

「こんにちはー！私はイズ。貴女は？」

「あ、はいー！えつと…：…メイプルつていいます！よろしくお願いします！」

「よろしくね、メイプル。」

そう言つてイエーガーはメイプルに手を差し出した。

その意図がわかったメイプルは同じ様に手を出して互いに挨拶をした。

そんな2人の様子を見ながらクロムはイズに近付き、イエーガーのことについて尋ねた。

「（なあイズ。あの子つてもしかして。）」

「（クロムの予想通りトッププレイヤーの1人であるイエーガーちゃんよ。クロムが4日目に遭遇したっていう。）」

「（…：…マジかよ。）」

実はクロムはイエーガーが『百獣王』を倒した後に『光速化』を使った時に遭遇したプレイヤーである。

実際には目撃したただけではあるが。

「所で本題は？」

「ああそうだ。この子が格好良い大盾が欲しいっていうから顔見せだけでもさせておこうと思つてな。」

「成る程ね。私の名前はイズ。見ての通り生産職で、その中でも鍛冶を専門にしてるわ。調合とかも出来るけどね。」

「へえー…凄いですね！あ、えつと私はメイプルつて言います！」

「メイプルちゃんね。大盾を選んだのは何でかしら？」

「えつと…あの痛いのは嫌だったんで、防御力を上げようと思つたんです」

それを聞きイエーガーは「へえ〜。」と呟く。

元々格闘技をやっていたイエーガーからすれば戦えば痛みも伴うというのは当たり前だったので、あんまりそう言うのは考えていな

かった。

「んー…成る程成る程。じゃあVIT特化装備が良さそうね…でも……予算、ないでしょ。」

そう言われてメイプルは予算を確認した。

イエーガーが覗き込むとそこには初期値の3000Gのままであつた。

「それじゃあ足りないと思うよ？最低でも百万ゴールドだし。」

「うう……しばらくオシャレはお預けかなあ。」

「他にはダンジョンに潜るなんてのもあるわよ？ダンジョンにはお宝がいっぱいあるの。お金を貯めるのも兼ねて、一度行ってみたら？まあ、強力な大盾があるかは分からないけどね」

その言葉を聞きメイプルはダンジョンに行く事にした。

イエーガーはせっかくなのでそのダンジョンまで一緒に同行することにした。

クロムとメイプルにフレンド登録をお願いすると快く承諾してくれた。

その後は最下級のポーションを買いただけ買って、メイプルを背負って目的のダンジョン『毒竜の迷宮』へと向かう。

『毒竜の迷宮』は【毒耐性】を鍛えているのにもよく使っている場所なのでそこでいいかと決めた。

---

241名前：名無しの大盾使い

大盾の少女に遭遇したというかフレンド登録したw

ついでに例の赤いマフラーの娘も

242名前：名無しの槍使い

は？

243名前：名無しの弓使い

どうやって？

244名前：名無しの大盾使い

ログインしてきた時にめっちゃキョロキョロしてて一瞬目が合ったと思ったら走ってきて話しかけられたw

赤いマフラーの娘は知り合いの生産職の所で知り合いと戯れてた

245名前：名無しの大剣使い

大盾の少女コミユカたけーな

246名前：名無しの槍使い

赤いマフラーの娘って4日目に遭遇したっていう？

247名前：名無しの大盾使い

そのとおり

248名前：名無しの槍使い

マジかよ

249名無しの魔法使い

∨244

で、その後は？

250名前：名無しの大盾使い

まずは大盾の少女からな

格好良い大盾って言われて

俺が生産職の人紹介するからついてこいっていったら後ろついて

きた

AGI低すぎて俺についてくるのもしんどそうだったな途中何度か止まってあげたし

赤いマフラーの娘はさつき言った通り知り合いの生産職の奴と戯れてた。

見た感じ武器はなかった。

251名前：名無しの槍使い

その知り合いの生産職って男？女？

252名前：名無しの大盾使い

女

253名前：名無しの槍使い

マジかよ（二度目）百合かよ

っていうかしんどそうってお前AGIいくつよ

254名前：名無しの大盾使い

まあ待て今まとめ

いくぞ

名前はメイプル

パーティーは組んでいない

大盾を選んだ理由は攻撃を受けて痛いのは嫌だから防御力を上げたかったとのこと

超素直で活発系少女

総評

めっちゃ良い子

あー見守ってあげてー

後お前らとはメイプルちゃんに関する情報を交換していきたいと思ってるから俺の情報晒すわ

取り敢えず俺はクロムって名前やってる

んでAGIは20な

お前らとはフレンド登録しときてーから明日これる奴は22時頃に広場の噴水前に来てくれると嬉しい。

255名前：名無しの槍使い

情報サルクスっていうかお前クロムかよ！

バリツバリのトッププレイヤーじゃねーか！

256名前：名無しの魔法使い

有名人過ぎてビビったわw

257名前：名無しの大盾使い

それを言うなら赤いマフラーの娘だってトッププレイヤーだぞ

258名前：名無しの魔法使い

そ　　う　　だ　　っ　　たw　w　w　w

259名前：名無しの弓使い

よっしゃその時間行けるわw

つかAGI20に置いていかれるとかメイプルちゃん本当にVIT極振りかもしれん

赤いマフラーの娘の情報は

姿だけ知ってるけど名前知らん

260名前：名無しの大盾使い  
名前はイエーガー

リアルで格闘技をやったから武器無しの素手らしい  
装備はダンジョンでの戦利品との事

261名前：名無しの槍使い

名前が女の子の名前じゃないw

262名前：名無しの弓使い

ダンジョンでの戦利品だと？

そんなダンジョンあったか？

263名前：名無しの大盾使い

『太陽の祭壇』って所でライオンの獣人と戦ったらしい

方法については金色のカブト虫が落とすメダルで行けるらしい

264名前：名無しの槍使い

金色のカブト虫ってなんかレアそうだな

265名前：名無しの大盾使い

初日で手に入れたって言った

266名前：名無しの大剣使い

まじかよ!?

俺も探してみよ

267名前：名無しの魔法使い

まて！偶然手に入れたのかもしれないぞ！

もしかしたらそう簡単には会えないものかもしれん

268名前：名無しの弓使い

なるほど、一理ある

269名前：名無しの槍使い

では暇があるものは金色のカブト虫の搜索

あとは祭壇の搜索でいいな？

270名前：名無しの大剣使い

了解

それじゃあこれからもメイプルちゃんとイエーガーちゃんを暖かく見守っていく方向でいいかなー？

271名前：名無しの槍使い  
いいともー！

272名前：名無しの弓使い  
いいともー！

273名前：名無しの魔法使い  
いいともー！

274名前：名無しの大盾使い  
いいともー！

掲示板でそんな話がされている中、イエーガーとメイプルは『毒竜の迷宮』に到着し、探索を行っていた。

とは言うものの、ボス部屋までの道のりはイエーガーが知っている為迷うこと無く何体かのモンスターを倒しながら向かった。

「ついた！ここだよ、メイプル！」

「ほへえ。この大きな扉の先にボスがいるの？」

「そうだよ。他のプレイヤーさんと戦った時はとても苦労したよ。だから気を引き締めて！」

「は、はい………ってあれ？イエーガーさんは行かないんですか？」

メイプルはイエーガーと一緒に入らない事に疑問を持つ。

その問いにイエーガーは答える。

「メイプルは装備が欲しいんでしょ？だったら一人で行った方がいいよ。きつといい装備が手に入るから。」

「なるほど！分かりました！」

「行ってらっしゃい。」

メイプルはイエーガーの返答に納得するとボス部屋の扉を開けて中に入っていった。

閉まったと同時に中から『ひゃん!?』という声が聞こえ（可愛い。）と思った。

「よし！私は【毒耐性】の効果を上げに行こうと！」

メイプルを見送ったイエーガーは前と引き続き、【毒耐性】を鍛え始めた。